

学校点描

職員室から山々を覗いてい
ると青空に大きな鳥が気持ち
よさそうに飛んでいます。

《最上中学校》

NO. 3 H28. 5. 20

担当：教頭

体育館での運動会は心配した以上に感動的なものとなりました。どんな状況でも全力で出す3年生の姿や、悔しくて惜しげも無く流す組頭の涙は、その姿に共感した多くの大人達の心を揺さぶりました。

地区駅伝大会の結果は、決して満足したものまではいきませんでした。路肩で応援しているM中生の姿に賛辞の声をいただきました。トップから大きく離れた他校のランナーに惜しげも無く声援を送る姿のことをいっているようです。

全員ががんばっている姿は美しいものです。学校全体が上昇気流に乗り始めた感じがします。

しかし、一方で、その気流に乗り切れていない子どもがいらないのか、一人ひとりにそんな目を向けることが教育者として大切です。これまでの経験から、今の時期は1学年での人間関係のトラブルが頻繁に起こります。しかし、それは1年生だけなのだろうか、2年生はどうだろうか。落ち着いていると言われている3年生は本当に大丈夫だろうか。本物の上昇気流に乗っているのかどうかは、学校だけでなく家庭生活での観察も必要です。それが学校と家庭との両輪です。そのためにも、まずは23日から生徒と教師1対1の教育相談を始めます。

同感よりも共感

トンビはなぜ輪を描いて飛ぶのかを研究した人がいるそうです。翼をばたつかせないで滑るように飛んでいます。これは、上昇気流の塊（上昇気泡と言うのだそうです）の縁からはみ出さないように、三味線のバチみたいな尾羽を上手に動かしながら滑空しているからだそうです。うまく上昇気流に乗っているとすれば、翼は動かさなくともただ風に身を任せるだけでいいわけです。苦労せずともどんどん高みを目指せる道理がわかります。

そうだとすると、どんなことにも「子どもが頑張ったら、努力すること自体や努力した成果をしっかりと評価してあげる」ことが大切です。幸い、運動会をはじめ、各教育活動の場面で生徒たちが見せている姿は、大勢の方々に驚きの感動の声をあげさせています。

一昨日は、午前あがりの日でした。それは町内全小学校の先生との会議を持ったからです。その中で、“小学校7年生”という言葉が話題になりました。中学生としてまだまだ子どもっぽさが抜け切れていないのではないかという意味で使っている反面、小学校時代よりは少しずつ成長しているのではないかという捉え方もできるわけです。マイナスだけでなく、プラスの表現にもなるという話だったように思います。

中学生は、大人への成長を始めた子どもと、まだまだ自分の欲望のままに動いてしまう子どもがごっちゃになって、ミックスジュースみたいな状態です。それが、同じ人間の内側に起きるのですから、あるときは「大人になったなあ」と思える瞬間があり、またあるときは「まだまだ子どもだなあ」と思う瞬間があったりするのです。

子どもが大人になるのは、案外階段ではなくて上昇気流に乗るのと同じなのかもしれません。そうであれば、子どもが大人になる瞬間を見定めたいわけです。

（以前聞いた生徒の会話から～）

「昨日、〇〇（名前）休んだから（部活？、塾？）、プリントを家に届けたら、元気な顔してだっけよ」と、誰かが言っています。それを聞いている周りの子は、「えー？やばくね！」という声。

きっと、ズル休みしていたんだって言わんばかりです。

生徒達の何気ない日常の会話を聞いてみると、特に仲良しグループでは同調し、同感しあう会話が多くのに気づきます。これは、Line やメール、ネットでの会話が、どうしても相手の話に同調する傾向が強いからではないかと思うのです。ネット上で誰かが誰かを批判すると、たちまち、同調の批判コメントが集まり炎上していきます。SNS なんて同調・同感したら『いいね!』とボタンを押すサイトがほとんどです。同調・同感の押し売りです。

子どもの社会は同調の脅迫概念が支配することがあります。だからこそ、相手の勝手な判断にも、すぐに同調・同感してしまいます。「わたしだけじゃない、みんなもやっているもん」そんな言葉の裏側にあるのが、この同調・同感する子どもの社会構造です。

昔、道徳で“ちいちゃんのつめ”という作文を題材に考えさせたことがあります。内容はこうです。つめを切れと学校で指導されても切らないある女子生徒。名前は千津子さん。みんなは、不良扱いして、気軽に話し掛ける友もいません。でもある時、運動会でその生徒が走るときに、この作文の筆者である女子生徒は、その生徒に「がんばって」とつぶやき気味の声をかけます。その生徒は、ダントツの1位でゴール。その後、「おめでとう」「ありがとう」という言葉が交わされ、だんだん心が交流していくという話です。最後は、親しみをこめて筆者である生徒が、相手の生徒に「ちいちゃん」と呼ぶことにしたら、次の日、ちいちゃんは、両手を見せてくれたという結末。そこには、きれいにつめが切られている指があったという話でした。

「どうして、このちいちゃんっていう子は、つめを伸ばしていたんだろう。」って尋ねます。一同、しーん。なかなか発言ができません。

「理由が欲しかったからかな・・・」

ぼそぼそと、言葉を紡ぎ出します。

「つめを伸ばしているから、それが理由でみんなから嫌われていると思える。嫌われている理由が欲しかったんじゃないかな」

「じゃあ、どうしてつめを切ることができたの？」と最後に問います。

「自分には友達がいるって思えたから」と今度は別の生徒が答えてくれました。

同感の結果に対しての同感、共感の出発点を同じにすること。

同感になれた子どもたちに、共感の大切さを知ってほしいんです。相手が涙をながしている、その出発点は何か。そこに共感が生まれます。大人たちが組頭の涙に感じたのは結果ではなく組をまとめてきた出発点を感じたからです。

「恥ずかしかったんだよ」 傍らにいた女子生徒が話しているのが聞こえました。

するともう一人が「（家にきてくれて）照れてるんじゃない」なんて言っています。

同感よりも共感。他者の立場を考える生徒が増えれば増えるほど、学校に吹く上昇気流の風は、強く吹き続けます。

きりとりせん

ご意見・ご感想をお願いします。